

故郷第四場面 読んだ読んだ

三年四組

氏名

今、母の口から彼の名が出たので、この子どものころの思い出が、電光のように一挙によみがえり、わたしはやつと美しい故郷を見た思いがした。そのあと、近所にいる親戚が何人も訪ねてきた。その対応に追われながら、暇をみて荷ごしらえをした。そんなことで四、五日つぶれた。



主人公はレントウとの思い出が電光のように一挙に蘇った。そして母に「で、—今、どんな？」と尋ねた。しかし母は「どんなつて……」と最後まではつきりと言わなかった。言えなかったと読み取れる。なぜなら苦しい生活をしていることを知っているから……。そんな中、ヤンおばさんに会った。彼女は昔、美人だったが、今は製図用の足の細いコンパスのようで、外見だけでなく性格も悪くなっていた。

さん

主人公と母のヤンおばさんとの再会で、良かったのは、母がレントウの暗い現実を話したくなくて、少し黙ろうとしているときに、ヤンおばさんが来てくれて、母も主人公もあまり嫌な思いをしなくて済んだこと。粋なかつたことは、白粉をぬり、唇も厚く「小町」と呼ばれ性格の良かった人が、経済的に苦しくなると人柄まで変わってしまうと分かり、レントウも変わっているのかと心配になったこと。これらから、より主人公と母が現実から逃げようとしていることが読み取れる。

さん

主人公は、レントウのことで少し美しい故郷へ帰ってきたような気持ちになつていたが、母がはつきりと言わないところや、戸外へ目をやり話を終わらせようとしていることから、かつて「豆腐屋小町」と呼ばれていたとは思えないぐらい見た目も性格も悪くなり変わってしまったヤンおばさんのように、レントウも昔とは違う人格になっているのではないかと思ひやつていことが分かる。このように人が変わつていったのは経済的に苦しくなつたことが理由の一つであると思う。

さん

ヤンおばさんは、脚がコンパスのようで近寄りたたい人だった。昔のヤンおばさんは豆腐屋小町と呼ばれていて、店も繁盛していた。しかし、ほお骨が出て昔のような姿はなかった。性格も悪くなり、冷笑を浮かべたり「お金持ち」「知事」などと言つて皮肉つたりしていた。ヤンおばさんは、貧乏になり、経済的に苦しくなつて、人柄が変わつてしまったのだ。

さん

主人公は最初、ヤンおばさんのことが分からなかった。それくらい見た目が変わつていた。金の話をして皮肉なことを言っていることから、性格まで変わってしまったことが分かる。また、お金の話を出して道具をもらおうとしていることから、ヤンおばさんは貧乏であることが分かる。このようなことにより、人柄が変わつたことが描かれている。

さん

主人公は思ひがけずヤンおばさんと再会した。しかし、ヤンおばさんには「豆腐屋小町」と呼ばれたころの面影は全くなかった。今では主人公を皮肉つたりする、コンパスのような人になつてしまった。「母の手袋をズボンにねじ込んで。」の「ねじ込む」という表現からも、奥深い皮肉が感じられる。貧しくなつたことが原因で人柄までもがらりと変わつてしまったのだ。コンパスは、墮落した故郷の象徴であった。

さん